

## 文部科学大臣奨励賞

「僕の生まれたところは」

イ ゼフン

Mr. LEE JaeHoon

(韓国・高校生)

両親の留学中、東京で生まれ、3才の時に離日。現在、韓国の外国語高校に在学中。本日、学校で一年間学んだ日本語を皆さんの前で発表します。将来は、日韓友好のために役立つ外交官になりたい。



東京都国分寺市西町1-8-25、これは僕の生まれたところの住所です。両親が留学していたので、僕は日本で生まれ育ちました。そして三歳のときに日本を離れたのですが、日本から持って帰ったおもちゃのおかげで僕はいつも人気者でした。韓国の友だちはアンパンマンやウルトラマン、そしてロボットなどをテレビで見ることしかできなかったのですが、うちに遊びにくると、それが絵本や人形になっていて手に取って遊ぶことができたのです。だからとても喜んでいました。特にウルトラマンの好きな友だちがたくさんいて、日本語だらけの絵本を開いては「これ読んで」とせまるのです。

「伝説のウルトラ兄弟の復活！

ジョニーアス！！大切なのは諦めないことだ。信じる力が勇気になる。」

本当は、僕は日本語がぜんぜん読めないのに、ビデオで見たのを丸暗記していたとおり読んでいるふりをしたのです。そうしたら友だちはみんなメロメロになって「すごい！！」と歓声をあげます。そして、「なんでこんなのをいっぱいもってるの。うらやましいよ。」と言われ、僕は自慢げに「僕は日本で生まれたんだ。日本にはこんなのいっぱいあるの。」と答えていたのです。

そうしているうちに僕はいつの間にか友だちの間で「日本人」と呼ばれるようになりました。両親が韓国人だから日本人ではないと言っても無駄でした。また、そう言われることが決していい意味だけではないことも自覚するようになりました。それは歴史的なことによる一般の人たちの感情と僕個人が個人として感じることとのギャップとでも言いましょうか。子供なので何かよくわからなかったのですが、気まずいような雰囲気を感じました。とにかく日本で生まれたことを僕は誇らしく思っていたのに、そういうことがあってからだんだん隠すようになったのです。子供ながらに心のどこかでは「ゼちゃん」とあたたかく呼んでくれた保育園の先生や友だちに別れを告げるような何か悪い気がしました。

その後、成長しながらもこういうモヤモヤした気持ちはずっと自分の心のなかにあって、決して消えることはなかったのです。それは、自分の生まれ育ったところへの愛情と自分のアイデンティティとも関係のあることだからでしょう。そして、自分の経験したありのままの日本を周りの友だちに見てほしいという小さな願いが生まれました。そのためには、日本語を忘れてはならないと思い、外国語高校へ進学し、日本語を勉強するようになったのです。

さて、僕は今、慶北外国語高校の二年生ですが、去年日本の姉妹校の女子学生たちがうちの学校を訪問したことがありました。僕たちはみんなアニメで見たような短いスカートにセーラ服姿を首を

長くして待っていました。いよいよ彼女たちを乗せたバスが到着し、バスから降りた瞬間、僕たちの期待はため息とともに見事にはずれてしまいました。よりによってその年は長いスカートが流行ったそうで、みんな長いスカートをはいていたのです。しかし、僕たちは片言の日本語で学校や町のあちこちを案内しながらいろいろなことを話し合うことができました。

「へえ、そうなの？おもしろい！」

「うそ！それマジ？」と笑っている横顔もかわいかったのですが、それよりも教室で習った日本語が実際日本人と会って通じたということ、そして国は違っても興味や好みなどが同じで若者同士の仲間意識のようなものを感じたということが何よりうれしかったのです。

その後、日本から手紙をもらいましたが、そこには「(アンニョンハセヨ)」と挨拶がハングル文字できちんと書いてありました。彼女が韓国語に関心をもってくれたということもうれしかったのですが、そのことが何かの明るいキザシのように思われました。そして、自分の心の中でのモヤモヤした気持ちもスッキリしたような気がしました。

‘そうだ。自分の感じたことをもっと大切にしていこう！’

たしかに日本と韓国は、歴史や文化そして言葉も違います。しかし、こういう若者同士の交流の場を通して相手や相手の国に対しての理解を深めて行くことが、今の時代に何より必要ではないかと思えます。SMAPの「世界に一つだけの花」という歌のように、僕たちはそれぞれ違う種から咲いた一つだけの花です。その美しさを競うのではなく、個人個人がその美しさや香りを楽しむこと、そして、助け合っ

てみんなできれいな花束を作っていくことが大事ではないでしょうか。

‘僕が生まれたのは日本です。’